

25.10.30 日本子ども宣教局伝道学校（11月学院福音化）

11月1か月は祈りに関連する内容です。そこで、今日この時間には、聖書でイエス様が言われた祈りについて見る時間になります。ルカ11章1節を読んでみます。

ルカ 11:1

さて、イエスはある場所^{ばしょ}で祈^{いの}っておられた。祈りが終わると、弟子の一人^{ひとり}がイエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

ここに記録されている祈りという単語は、ギリシア語では何なのかは以前も言いましたが「プロセウコマイ（προσεύχομαι）」です。これは合成語です。

祈り「プロセウコマイ（προσεύχομαι）」
「プロス + エウコマイ」
（～に向かって）（願う、求める）
1.神様が私たちに向かって願っておられること
2.そのとおりになりますように

プロスは、何かに向かってという単語で、エウコマイは、切に願う、求めるという単語です。
意味としては、神様が私たちに向かって願われることがあるということです。神様が私たちに向かって願われることに方向を合わせて求めること、それが私たちの祈りになるのです。神様が願われる、それが私の人生にそのようになることを願いますということです。私が先に何か要求して願って、神様から勝ち取ることが祈りではないのです。神様が願われることが私に成し遂げられること、これが主の祈りにある内容です。マタイ6章にも記録されていますが、今日見たルカ11章にも記録されています。祈りを教えてほしいという弟子たちに、主の祈りを教えてくださいました。11章2節から4節を読んでみましょう。

ルカ 11:2-4

- 02 そこでイエスは彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。』」
- 03 私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください。
- 04 私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。私たちを試みにあわせなさい。』」

よく知っている主の祈りの内容ですが、マタイの福音書にある内容とは少し違う部分があります。皆さんがとてもよく覚えている祈りの内容ですが、礼拝のはじめや終わるとき以外は、あまり言わないでしょう。普段のときに主の祈りの内容を考えて祈っている人はいますか。あまりいないと思います。感謝なことに、私は毎朝、朴先生を含めたほかの牧師先生たちと祈りの集いしているのですが、朴先生はこの主の祈りの内容を語られるので、感謝しています。

では、このように祈りを教えてほしいという弟子たちに、私たちがよく知っている主の祈りの内容を話して下さった後に、どんなたとえを語られたのかを、引き続き見てみましょう。11章5節から8節を読んでみましょう。

ルカ 11:5-8

- 05 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうちのだれかに友だちがいて、その人のところに真夜中に行き、次のように言ったとします。『友よ、パンを三つ貸してくれないか。』
- 06 友人が旅の途中、私のところに来たのだが、出してやるものがないのだ。』
- 07 すると、その友だちは家の中からこう答えるでしょう。『面倒をかけないでほしい。もう戸を閉めてしまったし、子どもたちも私と一緒に床に入っている。起きて、何かをあげることはできない。』
- 08 あなたがたに言います。この人は、友だちだからというだけでは、起きて何かをあげることはしないでしょう。しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげるでしょう。

皆さんよく知っているたとえでしょう。しかし、みことばを誤解をする場合があります。このたとえの内容を、最後まで求めて、あきらめずに、しつこく求めれば答えられる、そのように思っていないませんか。神様が面倒がられるほど、続けて粘り強く祈れば答えられるというように言う場合がありますが、このみことばは、全くそのようなこととは関係ないみことばです。

先に、このたとえの内容を理解するためには、ユダヤ社会の当時の文化を理解する必要があります。ユダヤ人は共同体生活をしていました。村単位で皆が共同体生活をしていたのですが、家ごとにみな（パンを焼く）オープンがあったわけではありません。ある家もあり、ない家が多かったのですが、村で共同で使うパンを焼くオープンがあったのです。それで、その村の家庭が順番に、今日は私がパンを焼いて、明日はあちらの別の家庭でパンを焼いて・・・そのようなかたちで、その村全体のパンを担当する家がありました。

そして、ユダヤ社会での友だち、友という関係も、今日の私たちが考える、そのような関係とは全く違う関係です。本当に血を分けた兄弟より、さらに近い仲の人を友だちだと言います。その友だちとして結ばれた者は、お互いの必要を何でも願うとおりに満たすことができる関係を言うのです。それゆえ、夜に訪ねてきたがお腹が空いたからパンをくださいと言われたら、与えなければなりません。ところで、その訪ねて行った友だちの家は、その日のパンを担当する家ではなく、食べる物がなかったのです。そこで、その日その村のパンを担当した家に訪ねて行って、パンをくださいと要求をしたのです。また、その夜に訪ねてきたその友だちは、その訪ねて行った家の人だけのお客さんでなく、村全体のお客さんと同じなのです。それゆえ、「友だちだからというだけでは、起きて何かをあげることはしない」という話は事実はありません。当然、あげることになっていて、与えないはずがない状況です。あなたに上げられないから、私は友だちではなく絶交しようと言うことはできない状況です。そして、その後にある「しつこさのゆえなら・・・あげるでしょう」ということばも、「しつこさ」と訳している単語の本来の意味はそのような意味ではありません。この単語のギリシア語は「アナイデイアン」という単語なのですが、この単語の本来の意味は「恥がない、恥ずかしさを知らない」このような意味です。そのために、「しつこさのゆえに、あげる」という部分の本来の意味は「恥をかかないように、あげなければならない」ということなのです。ユダヤ人は恥をかくことを命を失うことよりさらに重要に思っていました。それゆえ、その一人だけの恥ではなく、村全体の恥なので、そのために、絶対にあげるようになっているということを語っているのです。

では、祈りを教えてほしいという弟子たちに主の祈りを教えられた後に、すぐに続いて、このパン三つ貸してくれないかと求める友だちの話がされました。その話は、すなわち、その直前に教えた主の祈りの核心は何かということでしょうか。パン、糧、それが主の祈りの核心だということです。

はじめて聞く話のように思えて、理解できないかもしれませんが、その部分は、後ほど再び説明します。

主の祈りに書かれているギリシア語の動詞は、時制がすべて不定過去（アオリスト）の時制です。その時制は（ギリシア語特有の時制で）、「すでに過去の一度で完了された状態を強調する時制」です。ところで、そのような不定過去の動詞にまた、命令形を付けているのです。そのようなときは、過去に一度起こった事件なのですが、それは過去と現在、未来全体を合わせる言葉だという意味になります。たとえば、主の祈りで「御国が来ますように」ということばがありますが、それは御国が「すでに臨んでいて」、「今、臨み」、「完全にこれからも臨む」という意味をすべて持っている言葉なのです。難しい話なので、すべて覚える必要はありませんが、過去、現在、未来、いつも、私たちにしなければならないことを話しているということです。

そして、主の祈りの核心と言える「日ごとの糧を、毎日お与えください」というのも、事実、それは明日の必要の糧を求めることばです。聖書を見れば、「日ごとの糧」の部分に（脚注を見る）星印があるでしょう。脚注には「明日のための糧」とも訳すと書いてあります。イスラエルの民が明日の糧を必要とした時は、いつだったでしょうか。荒野生活をしてきた時だったでしょう。マナを神様がくださったのですが、安息日の前の日には、明日の糧までいっしょに集めました。それも、安息日には休まなければならないから、仕事をしてはいけなないので、あらかじめ集めておけ、というような意味ではありません。安息というのは何でしょうか。永遠の安息。神の国。その神の国に入るのは、今日与えられるその糧によってだけ可能だということです。それがすなわち明日の糧なのです。明日というのは、「tomorrow、今日の次の日」そういう意味ではないということです。あなたの明日に神の国での永遠の安息に入る糧は、今日、神様が与えられるその糧によってだけ可能だということです。

それでは、そのパン、その糧とは何でしょうか。イエス・キリストです。それゆえ、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」と言われたでしょう。イエス様が、みことばが人となって来られた方で、天から下って来たまことの糧、いのちのパンとしてこの地に来られたのです。ヨハネ6章48節から51節です。

ヨハネ 6:48-51

48 わたしはいのちのパンです。

49 あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。

50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。

51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

主の祈りの核心を「この糧、明日の糧」だと言いました。これを中心に、ほかの部分を見るのです。その天からの糧によって、私たちは神様を「父よ」と呼ぶことができるようになりました。その糧によって、「主の名をみだりに口にしない（御名を聖なるものとする）」者となり、神様のその糧によって「神の国に生きる」ことになり、その糧によって「天でなされたみこころが、地でもなされることを見て」生きるようになったのです。その糧によって私たちは「罪を赦され」そして、「ほかの人々にも、その罪の赦しを伝えることができる」ようになりました。その糧によって、私たちは「試みにあうことなく、悪から救われる」ようになりました。その糧によって、「神様の国と力と栄えを永遠に父なる神様にささげる」ことができるようになったのです。そのパン、糧、それがイエス・キリストです。もう理解できるでしょう。

それゆえ、祈りを教えてくださいと言った弟子たちに、このような主の祈りを教えられたのは、単に宗教的に行いとして熱心に唱えて祈りなさいと教えられたのではなく、弟子、すなわち信徒である神の民のアイデンティティがどんなものなのかを教えられたのであり、そのような私と皆さんが実際に生きる生活がどんなことなのかを教えられたのです。ひとこと言うと、「あなたがたは、天の糧、そのいのちのパンであるイエス・キリストを食べた者だ。そして、そのパンをいつも食べなければならない。そのパンだけで永遠に生きるようになる」ということを語っておられるのです。

「パン」のことをたくさん言っていますが、「イエス・キリスト」のことを言っているのです。そこで、たとえば語られたパンを求める友だちの話ですが、なぜ、よりによってパンを二つや四つでなく、パン三つを求める話をされたのでしょうか。パン三つ。パンという単語が主の祈りにあった「糧」という単語と同じ単語です。そして、三つのパンという「三」の原語は「トレイス」という単語です。三つを意味するのですが、聖書では「三」という数字は神様の数です。三位一体の神様です。また、「完成と完全の意味」もあります。ですから、三つのパンを求めて、それを受けたというのは、神様から来るその完全な神様を受けたという意味になります。神様は最初から私たちに神様自身を与えると約束されたでしょう。原始福音の「女の子孫」それは、イエス・キリスト、神様です。それゆえ、「プロセウコマイ」という祈りは、「神様が与えると願っておられるそのパン、その糧が、いつも私にあることを求める」ということでなければならぬのです。それゆえ、毎日、毎時間、毎事件なのです。簡単な単語で言うと、「いつも」です。マタイ6章33節で話す、「まず神の国と神の義を求めなさい」というみことばも、結局は同じ話です。この地の食べること、飲むこと、着ることを求めるのではなく、天の糧、そのパンを求めて生きなさい。ヨハネ6章27～29節です。

ヨハネ 6:27-29

27 なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくならない、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。それは、人の子が与える食べ物です。この人の子に、神である父が証印を押されたのです。」

28 すると、彼らはイエスに言った。「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」

29 イエスは答えられた。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」

天の糧を求めて、その方だけで私が十分であると信じる信仰によって生きるように願います。

では、ルカ11章に戻ります。

パン三つを求める友だちに、当然与えなければならないパンを与えるという話でしたが、その後、すぐに続くみことばが何でしょうか。また、皆さんよく知っているみことばですが、ルカ11章9節から12節を見ましょう。

ルカ 11:9-12

09 ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。

10 だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたき者には開かれます。

11 あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わりに蛇を与えるような父親がいるのでしょうか。

12 卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるのでしょうか。

「求めなさい。探しなさい。たたきなさい」よく知っているみことばですが、その上の聖句の内容とつなげてこのみことばを見なければなりません。天の糧、パンに関連していることなのです。神様が当然与えられたと言われた、それを求めれば、与えられるということです。神様が与えたと約束された、それを探せば見出すことができるということです。神様が当然与えられたと言われた、それをたたけば開かれるようになるということです。

「求めなさい、探しなさい、たたきなさい」

アイテオ (αἰτ εἶτε) 要求する

ゼテオ (ζητεῖτε) 探す、求める

クルオ (κρούω) たたく

求める（アイテオ）、探す（ゼテオ）、という単語は、単に仕方なく求めるのではなく、当然、受けなければならないことを求めて要求するという内容です。簡単に話せば、私に借金をしたとします。その借金のお金を返しなさいということと同じです。当然、受ける権利がある者として要求することを言います。たたく（クルオ）という単語ですが、出エジプト記17章を見ると、岩をたたいて水が出てきたでしょう。いのちの水が出て来ました。イエス・キリストがこの地では、たたかれ、十字架にかけられました。しかし、その十字架で流された水と血によって、私たちが救われるようになったでしょう。

つまり、この求めなさい、探しなさい、たたきなさい、というのは、とんでもないこと求めて探してたたくということではなく、「いのちのパンであるイエス・キリストを求めて、探して、たたきなさい」ということです。

最初に言ったように、主の祈りを見れば、その糧はすでに私たちに与えられたのです。不定過去の時制で書かれています。しかし、そこにまた、命令形が加えられていると言いました。すでに与えられたのですが、今も必要なことで、これからもずっと必要なことだということです。それを、いつも求めなさいということです。

結論です。それなら、なぜ、私たちは祈りを通して毎日、毎時間、毎事件、求めて、探して、たたいて、天の糧であるイエス・キリストを受けて、食べなければならないのでしょうか。それを受けて食べることによって、私たちが生きる生き方はどんなものなのでしょうか。それが最後の結論の重要な部分です。そのように毎日すでに食べたのに、また食べなければならず、そのようにして食べ続けて生きなければならない理由は、神の素晴らしい生活を送るためです。それは、天のマナを食べた者として生きる生き方であり、すなわち、パンとして来られ生きられたイエス様の生き方にしたがう生き方をするを言うのです。イエス様は、この地にパンとして来られて、ご自分を出してください、そして、天に上られました。それは、自分を否定して、十字架を負う生き方をされたということです。すなわち、私たちに要求される生き方も、自分自身を否定して、十字架を負う生き方をするということです。ところで、そのような生き方は、私たちの力ではできません。それゆえ、この11章の祈りのことばの最後の結論がこのように与えられるのです。11章13節です。

ルカ 11:13

ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

いちばん良いプレゼント、聖霊を送ってくださるのです。その聖霊は、すでに私と皆さんの中に臨んでおられます。その聖霊が私たちの中でなさっていることはたくさんありますが、ローマ人への手紙を見ると、どう祈ったらよいか分からない、弱い私たちを助けてくださると言われています。ローマ8章26、27節です。

ローマ 8:26、27

26 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださいるのです。

27 人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださいるからです。

ですから、どれほど感謝でしょうか。

聖書が話す祈りについて、正しい定義を黙想しながら、11月1か月勝利するように祝福します。